◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第40回 帝都復興と朝香宮邸

Residence of Prince Asaka 1933—

未曽有の被害をもたらした東日本大震災。日本国中はもとより世界各地から、復興を祈って様々な支援の手が差し伸べられています。

かつて東京も1923（大正12）年の関東大震災により死者10万人以上、住家21万戸焼失など、壊滅的な被害を受けました。震災直後、政府は帝都復興院を新設し、総力を挙げて都市再建に取り組みました。元東京市長で時の内務大臣後藤新平が帝都復興院総裁として指揮をとり、道路の拡張や、公園の増設など、防災に強い都市計画に基づく区画整理に着手しました。

震災によって江戸情緒の残る庶民の住まいや、明治期の洋風建築など、江戸から明治にかけての都市の面影の多くは失われてしまいましたが、その一方で、日本人の建築家による優れたモダニズム建築が数多く誕生し、東京はモダン都市に生まれ変わりました。国会議事堂や首相官邸、地下鉄（現・銀座線）の駅、旧尋常小学校、最新式の集合住宅・同潤会アパート、お茶の水の聖橋や隅田川に架かる橋、その他官庁街、金融機関、百貨店、病院など復興期の建物は現在でも東京のランドマークとしてその姿を見ることができます。モボ、モガが闊歩した東京の街はいわば禍が転じて誕生したモダン都市といえるでしょう。

図1

当初の計画からかなり縮小されたものの、震災から7年を経て復興計画は完成、昭和5年3月には復興式典祭が行われました。このように新しい都市建造の機運が盛り上がるなか、朝香宮邸は昭和6年着工、2年後の昭和8年に白金の森のなかで誕生したのです。

震災当時、朝香宮両殿下は4人の子供たちを残し、殿下の怪我療養のためパリに滞在していました。高輪にあった朝香宮邸は、洋館部分がひどく傷んで取り壊され、残った家族は仮設の建物での暮らしを余儀なくされました。遠いパリの地で両殿下はこの震災の知らせを受け、新邸宅のプランをより現実的に考え始められたことでしょう。1925年12月に帰国された後も、精力的にパリと直接手紙のやり取りを続け、新邸宅の完成に情熱を傾けました。

図2

そして同時期に欧州留学から戻った宮内省内匠寮技師、権藤要吉の設計、戸田組の施工のもと、12メートルの深さにも及ぶ基礎工事のうえ、鉄筋コンクリート造りのアール・デコの館を完成させたのでした。1933年、関東大震災から10年後のことでした。

当時の最新の西洋の新様式（アール・デコ）を取り入れた旧朝香宮邸。現在も東京に残る復興の時代の素晴らしい成果でもあったのです。（岡部）◆

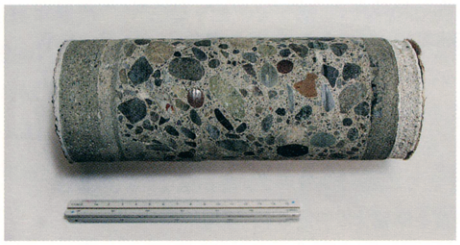

図4

図1.関東大震災直後の日本橋

図2.都市計画後の東京駅界隈

図1,2『The Reconstruction of Tokyo（東京復興）』東京市 1933年より

図3.竣工当時の朝香宮邸 1933年

図4.美術館耐震調査のためコア抜きされた旧朝香宮邸の壁断面。厚さ22,5cm。朝香宮邸新築工事録には、材料として使われている砂利は多摩川産の硬質の礫石とあり、調合についてはセメント1、川砂2、川砂利4の割合としている。耐震調査の結果、耐震指標の目標値を大きく上回った。

図3